上野城下町遺跡（第６次）発掘調査報告

～ 伊賀市上野東町 ～

２０１８（平成30）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、平成28・29年度に実施した街路整備事業（街路）伊賀上野橋新都市線に伴う上野城下町遺跡（第６次）の発掘調査報告書である。
2　調査地は、三重県伊賀市上野東町に所在する。
3　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から依頼を受けて実施した。発掘調査及び整理作業の経費は、三重県県土整備部から執行委任を受けた。
4　上野城下町遺跡（第６次）の発掘調査期間は、平成28年12月15日～平成29年８月29日である。
5　発掘調査面積は、140㎡である。
6　発掘調査及び整理作業・報告書作成の体制は、以下のとおりである。
　調査主体　三重県教育委員会
　調査・整理担当　三重県埋蔵文化財センター　　調査研究１課　　技師　水谷侃司
7　発掘調査および整理作業に際しては、地元の方々をはじめ、下記の機関に御協力を賜った。記して感謝したい。伊賀市上野図書館、三重県県土整備部、伊賀建設事務所（敬称略、順不同）
8　調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

凡　例

1　本書では、国土地理院発行の1:25,000数値地図（「上野」相当、平成20年10月発行）を用いた。
　三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（三総合地第１号）。
2　標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
3　本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。
4　本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
　ＳＫ：土坑　ＳＺ：性格不明遺構
5　土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
6　遺物実測図の縮尺は１：４とした。
7　註は各章の文末に付し、参考文献も註に記した。
8　遺構一覧表、遺物観察表は章末に付した。
9　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
　・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
　・色調は外面・釉薬の順に示し、標準土色帖のマンセル記号で表記した。
　・法量は完存ないし復元の値である。土器の残存率は全周を12分割して示す（例：口縁部3/12）。
　・胎土の緻密さは、粗・やや粗・やや密・密の４段階で示す。
　・焼成は、不良、やや不良、やや良、良の４段階で示す。
10　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目　次

例言・凡例 …… i
目　次 …… ii

Ⅰ　前　言 …… 1
1　調査の経緯と経過 …… 1　　2　調査の方法 …… 2

Ⅱ　位置と環境 …… 3
1　地理的環境 …… 3　　2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　層位と遺構 …… 6
1　調査区 …… 6　　3　遺構 …… 6
2　基本層序 …… 6

Ⅳ　遺　物 …… 9

Ⅴ　結　語 …… 19
1　上野城下町遺跡出土の擂鉢 …… 19　　2　調査区の城下町における位置 …… 19

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 5
第２図　調査区位置図 …… 5
第３図　遺構平面図 …… 7
第４図　土層断面図 …… 8
第５図　遺物実測図① …… 10
第６図　遺物実測図② …… 11
第７図　遺物実測図③ …… 12
第８図　遺物実測図④ …… 13
第９図　遺物実測図⑤ …… 14
第10図　遺物実測図⑥ …… 15
第11図　遺物実測図⑦ …… 16
第12図　上野城下町町割復元図 …… 20
第13図　明治初期城下町図 …… 20

表 目 次

第１表　上野城下町遺跡調査一覧表 …… 2
第２表　遺構一覧表 …… 6
第３表　出土遺物観察表① …… 17
第４表　出土遺物観察表② …… 18

写真目次

写真図版１　（全景・遺構） …… 22
写真図版２　（遺構・土層） …… 23
写真図版３　（出土遺物） …… 24
写真図版４　（出土遺物） …… 25
写真図版５　（出土遺物） …… 26
写真図版６　（出土遺物） …… 27
写真図版７　（出土遺物） …… 28

Ⅰ 前　　言

1　調査の経緯と経過

（1）調査に至る経緯

県道56号上野大山田線は、伊賀市市街地を通る主要道路である。毎年10月に行われる「上野天神祭のだんじり行事」（国指定重要無形民俗文化財）に際しては、屋台が軒を連ね、だんじり曳行も行われている。これまでに、地域住民の利便性向上のため、電線地下化・歩道拡幅等の工事が行われてきた。今回、事業主体を三重県県土整備部、実施機関を県伊賀建設事務所として、街路整備事業（街路）伊賀上野橋新都市線工事が計画された。

事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地（上野城下町遺跡）に該当するため、埋蔵文化財保護に関する協議を実施した。その結果、現状保存は困難であるという結論に達した。そのため、電線共同溝敷設部、歩道側溝敷設部、路床改良部分に関して埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

（2）既往の調査

三重県埋蔵文化財センターによる上野城下町遺跡の発掘調査は、これまでに平成12（2000）年から平成25（2013）年まで５次にわたり行われている。

第１～４次調査では、上野東町から上野恵比寿町にかけて調査が行われた[1]。主な遺構として、土坑・溝・ピット・鋳造関連遺構・土間などが確認された。主な遺物は、円筒埴輪・土師器・陶器・磁器などが出土した。

第５次調査では、上野農人町において調査が行われた[2]。主な遺構は、古墳・土坑・溝などが確認された。主な遺物は、須恵器・土師器・陶磁器・金属器・土製品などが出土した。これらの調査によって、城下町形成以前の台地上には、古墳が造営されていたことが明らかになった。

この他に、伊賀市教育委員会（旧上野市教育委員会・上野市遺跡調査会）によって調査が実施されている。これまでに行われた主要な調査については、第１表にまとめた。

（3）第６次調査の経過

調査期間は、平成28年12月15日から平成29年８月29日まで、工事の進捗に合わせて断続的に実施された。

以下に調査日誌（抄）を記す。

調査日誌（抄）

［平成28（2016）年］

12月15日　調査開始。道路西側の電線共同溝枡の調査を行う。近代以降の造成土により、攪乱を受けていた。

［平成29（2017）年］

３月22日　電線共同溝枡部分の掘削を開始する。地表下50cmで近世の整地層を確認。

24日　落ち込み（SZ601）を確認。

27日　土坑（SK602）、近代の便所（SK603）を確認。

29日　落ち込み（SZ601）の南端を確認。

31日　攪乱がひどく、遺物・遺構はなし。

４月４日　攪乱がひどく、遺物・遺構はなし。

６日　地表下50cmで近世整地層を確認。

10日　歩道側溝部分の掘削を開始する。
今後の工事日程等の協議を行う。

12日　攪乱がひどく、遺物・遺構はなし。

13日　造成土から、陶器・磁器が出土。

14日　地表下50cmで近世の整地層を確認。
陶器・磁器・鉄釘・古銭が出土。

５月10日　夜間調査。攪乱がひどく、遺物・遺構はなし。

13日　夜間調査。造成土中より、陶器が出土。

30日　夜間調査。近代攪乱土坑より、陶器・磁器が出土。

６月21日　夜間工事立会調査。道路東側電線共同溝に伴う調査。Pitを１基確認。遺物なし。

８月29日　調査終了

（4）文化財保護法にかかる諸手続

本発掘調査に伴う埋蔵文化財の文化財保護法等に関係する法的措置は、以下のとおりである。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育委員会教育長あて三重県知事通知）

・平成28年12月13日付け、賀建第5041号

②文化財保護法第100条第２項に基づく「埋蔵文化財の発見・認定通知」（伊賀警察署長あて県教育委員会教育長通知）

・平成29年９月６日付け、教委第187号

2　調査の方法

（1）調査区の設定（第２図）

県道56号線（銀座通り）西側歩道の電線共同溝及び、側溝敷設部分において、発掘調査を実施した。敷設工事と同時並行で調査を実施したため、実際は1.5m～２m幅の調査区であった。遺構平面図（第３図）においては、各調査区を結合して図化した。

なお、県道56号線車道下及び、東側歩道部については、以前の路床改良や、ガス管･水道管などによって大きく攪乱を受けており、近世に遡る遺物・遺構は確認されなかった。そのため、遺構平面図の作成は省略した。

（2）掘削

調査においては、重機を適宜利用し行った。遺構･遺物が確認された際は、写真･図面による記録保存、遺物の取り上げを行った。

（3）記録・図化

遺構実測は、任意の２点を結ぶ直線をもとに調査員による手測りで行った後、世界測地系座標に落とし込んだ。遺構平面図・土層断面図については、1/20で作成した。これらの図面に加えて現場の作業日誌も当センターで保管している。

遺構番号は、601番から通し番号で付した。

調査における写真撮影は、コンパクトデジタルカメラ（オリンパスTough）で撮影した。遺物の写真撮影は、ニコンD800Eを用いた。

註

1）三重県埋蔵文化財センター　『上野城下町遺跡発掘調査報告』2006

2）三重県埋蔵文化財センター　『上野城下町遺跡（第５次）発掘調査報告』2014

第１表　上野城下町遺跡調査一覧表

次数	調査地点	面積（㎡）	調査機関	調査年度	文献
	魚町（東ノ袋町筋）	300	上野市教委	1998	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報５（1998年）』1999
	上野田端町	230	上野市教委	1998	上野市教委『上野城下町遺跡発掘調査報告―野鳥新平下屋敷跡―』1999
	上野愛宕町（浩善中庭南屋敷）	110	上野市教委	1999	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報６（1999年）』2000
	上野恒生町（入交家土蔵部分）	36	上野市教委	2003	上野市教委『上野市埋蔵文化財年報９（2002年）』2003
	上野南大手町	140	伊賀市教委	2008	伊賀市教委『伊賀市文化財年報５（2008年）』2009
	上野北町（赤井家）	60	伊賀市教委	2013	伊賀市教委『伊賀市文化財年報11（2014年）』2015
第１～４次	上野東町～上野恵比寿町（東ノ袋町筋）	995	県埋文センター	2000～2005	三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡発掘調査報告―東ノ袋町（第１～４次）―』2006
第５次	上野魚入町	383	県埋文センター	2012・2013	三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡（第５次）発掘調査報告』2014
第６次	上野東町	140	県埋文センター	2016・2017	三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡（第６次）発掘調査報告』2018

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

上野城下町遺跡（1）は、三重県伊賀市に位置する。伊賀市と名張市を含む地域を伊賀地域とよび、かつての令制国の伊賀国とほぼ同じ範囲にあたる。

伊賀地域は、三重県西部に位置し、京都府・滋賀県・奈良県と県境を接している。伊賀地域は、四方を山地に囲まれた盆地である。北東部に標高766mの霊山が位置し、北西部は、標高600m級の柘植川段丘で隔て信楽高原と接している。南部には、標高600m～900mの布引山地が位置する。伊賀地域を流れる主な河川として、北部には、柘植川・服部川、西部には、木津川、南部には宇陀川・名張川があり、これらの河川はすべて合流し、淀川となり大阪湾へと流出している。三重県内で、大阪湾に流出する河川を持つのは、伊賀地域のみであり、地理的に関西地域と結びつきの強い地域といえる。

上野城下町遺跡は、盆地北部、南東方向の山地から延びる洪積丘陵の舌状台地に位置し、上野城跡（2）の南側に広がる近世の城下町遺跡である。台地の標高は、約150 ～ 180mであり、南北1.5km、東西2.4kmの範囲に城下町が形成された。現在、台地上の多くは、住宅地として利用されている。

2　歴史的環境

（1）弥生時代～古墳時代

城下町形成以前に遡る台地上の遺跡分布は、希薄である。台地北東に位置する柿之木団地遺跡（3）からは、弥生土器が出土している。また、隣接する車坂遺跡（4）からは、古墳時代前期と考えられる土師器の二重口縁壺や、いわゆるS字状口縁台付甕が出土している[1]。台地北西部、上野城の二之丸（伊予之丸）があった場所には、伊予丸古墳群（5）が位置する。昭和35（1960）年に行われた発掘調査によって、四禽鏡・鉄刀、円筒埴輪が出土しており、5世紀後半の古墳と考えられている[2]。また、上野城下町遺跡（第5次）発掘調査の際に、3基の円墳を確認している[3]。この古墳は、出土した須恵器の年代から、6世紀半ばのものと考えられる。これまでのところ、台地上から古墳時代の集落遺跡は見つかっていないが、台地の北側縁辺部を中心に古墳が築かれていたことが分かっている。

（2）古代

古代の伊賀国は、阿拝郡・山田郡・伊賀郡・名張郡の四郡からなり、律令体制下では、下国に位置付けられていた。伊賀国府は、柘植川右岸、伊賀市坂之下に位置し、伊賀国一宮敢国神社は柘植川左岸の伊賀市一之宮に位置する。柘植川右岸を通る奈良時代以前の東海道である加太越大和街道の沿線が古代伊賀の中心地であった。

台地上は、古代の遺跡が希薄であるものの、台地南東部に、伊賀国分寺跡（6）、国分尼寺にあたる長楽山廃寺（7）が位置している。国分寺跡の寺域は、東西220m、南北240mの範囲にわたる。残存する基壇跡などから七堂伽藍を持つ本格的な寺院であったことが分かっている。発掘調査は行われていないが、軒瓦が採集されている。長楽山廃寺は、国分寺跡の東160mの位置に所在する。金堂と講堂の基壇が残存している。国分二寺に挟まれる形で隣接する西明寺遺跡（8）からは、「寺」の刻書のある土師器皿が出土しているなど、国分二寺に関連する遺跡であると思われる[4]。

（3）中世

中世においても、台地上の遺跡は希薄である。台地北辺には、平清盛によって創建されたとされる平楽寺があったとされているが、その場所は定かではない。ともに、江戸時代の文書ではあるが、『伊水温故』には、「当寺ハ七十七代後白河院勅願所、平相国清盛承テ号上野山平楽寺（中略）往日ハ城内永蔵ノ辺ニ有テ諸宇ノ伽藍有」、『三国地誌』には、「旧平楽寺今ノ郭内（云伊予殿丸）ニアリ、後白河相国ノ創建」とあり、伝承を今に伝えている。その後、平楽寺は、天正9（1591）年の織田信長による、伊賀侵

攻（第２次天正伊賀の乱）の際に焼失したとされている[5]。

永禄11（1568）年には、伊賀国守護仁木長政が居館を台地上に築いている[6]。

上野城跡及び、上野城下町遺跡の発掘調査では、中世に遡る遺物も見つかっていることから、城下町形成以前においても台地上が利用されていたことが伺える。

（4）近世

天正13（1585）年閏８月、豊臣秀吉の命により、筒井定次は、大和国から伊賀国に国替えとなり、上野城の築城に着手した。城内東部の高台に、三層の天守閣を築き、北谷口を表門、南を裏口とした。筒井時代の城下町は、『茅栗草子』によると「上野城下旧ハ小田町と云」と記載されていることから、上野城の北西側低地に位置する小田町そして、城郭南側の街道沿いに城下町が築かれたものと考えられる[7]。

筒井定次改易後の慶長13（1608）年８月、藤堂高虎は、伊賀全域と伊勢・大和・山城の一部を領有した。藤堂高虎は、領国支配の拠点を津城とする一方、伊賀地域における統治の拠点として、慶長16（1611）年から上野城の大改修、並びに城下町の建設に着手した[8]。

藤堂高虎は、筒井時代の天守閣を廃し、城内西側に、五層の天守閣を築こうとした。しかし、天守閣は完成間近の慶長17（1612）年、竜巻により崩壊し、再び築かれることはなかった。また、城の周囲は高石垣でめぐらし、南を大手、北谷口を裏門とした。

藤堂高虎は、城下町を筒井時代の小田から、台地上に移転させ、大和街道、伊賀街道を引き込むなど、本城である津城との関係を重視した城下町の建設を行った。城下町内には、東西方向の主要道路として、本町通り、二之町通り、三之町通りを、南北方向には、東之竪町筋、中之竪町筋、西之竪町筋を整備した。上野城下町は、江戸時代を通して、度重なる大火に見舞われ、その都度、再整備を余儀なくされた。しかしながら、都市の基本設計は、近世を通じて大きく変更されることなく、その町割りは、往時の姿を留めている。

台地南端、桑町には、得斎窯跡（９）が築かれ、信楽の陶工小川得五郎が天保年間のごく短期間のみ擂鉢などの日用雑器に加え、古伊賀写しや湖東焼写し、色絵などの製作を行った[9]。

今回、発掘調査を行った上野東町は、本町通りの東端にあり、北野天満宮（上野天神社）の門前町として栄えた町である。ユネスコ無形文化遺産・国指定重要無形民俗文化財に指定されている「上野天神祭のダンジリ行事」で用いる“ダンジリ”は、文政年間（1818～30）の製作で『桐本』と名付けられている。印は逆鬼斗である[10]。

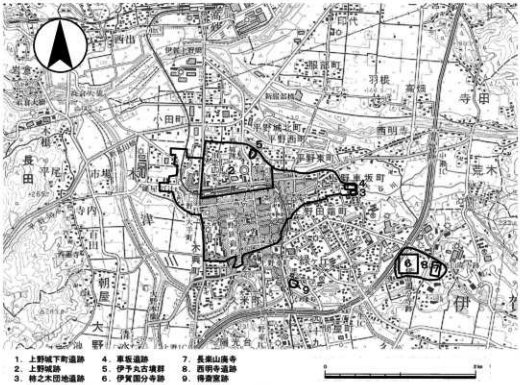
本町通りは、津城から上野城へと至る伊賀街道が上野城下町内に進入してきたものである。道幅は四間あり、城下町におけるメインストリートであり、道幅は城下町の中でもっとも広かった。上野農人町には、伊賀街道の起点を示す道標が残されている。

上野城下町には、東大手門より南進する東之竪町筋、西大手門より南進する西之竪町筋、その中間に位置する中之竪町筋が南北道路として造られた。

現在、東之竪町筋は、上野東町を中心に金融関連企業が立地していることから銀座通りとよばれる。戦中の防火対策や、戦後の開発によって道幅が拡張され、今日では、上野城下町において最も道幅の広い道路となった。

註

1）伊賀市『上野市史』考古編　2005
2）上野市教育委員会『伊予丸古墳発掘調査概報』1962
3）三重県埋蔵文化財センター『上野城下町遺跡（第５次）発掘調査報告』2014
4）上野市教育委員会『西明寺遺跡（５次）発掘調査報告』2004
5）『三重県の地名』日本歴史地名体系24　1983
6）5）と同じ
7）藤田達生「近世都市の形成過程―伊賀上野を中心に―」『Mie history』９　1998
8）7）と同じ
9）桂又三郎『伊賀焼通史』1968
　川崎　克『伊賀及信楽』1926
10）5）と同じ



第１図　遺跡位置図（1：50,000）

第２図　調査区位置図（1：1,000）

Ⅲ　層位と遺構

1　調査区

調査区は、県道56号線（東之竪町筋・銀座通り）西側歩道部分及び、旧北伊勢上野信用金庫ビル跡地に、幅２～４ｍ、長さ約40ｍ、面積約140㎡の範囲である。電線共同溝工事と並行して調査を進めたため、遺構平面図は実際の調査時は細分されていたが、結合して示した。土層断面図は、調査時の壁面で記録し、記録箇所は遺構平面図上に示した。

2　基本層序

今回の調査では、近代以降の開発のため、近世の明確な遺構面を確認することは、困難であった。調査区における基本層序は、上層から順に、アスファルト舗装・砕石層、ブロック土や遺物を含む近代以降の造成土層、近世遺物を含む近世の造成土層、基盤層である。

Ⅰ：アスファルト舗装・砕石層
Ⅱ：近代以降の造成土層
Ⅲ：近世の造成土層
Ⅳ：基盤層

多くの地点がⅠ層およびⅡ層の堆積であったが、一部では、Ⅲ層を確認することができた。調査時は、Ⅳ層上面まで掘り下げ、調査した後、適宜下層を確認するため、Ⅳ層を掘り下げた。

3　遺構

今回の調査区の大部分は、ガス管・水道管・通信ケーブル等の埋設に加え、コンクリート製の建造物があった跡地であり、鉄筋コンクリートの基礎が地表下1.5ｍあたりにあるなど近代以降の開発によって大きく攪乱を受けていた。そのため、城下町に由来する遺構や当時の生活面と考えられる層の残存状況は非常に悪かった。

ただ、地下配管やコンクリートの基礎によって攪乱を受けていない範囲においては、遺構や近世の生活面と考えられる層を確認することができた。

以下で、その遺構の詳細について述べる。

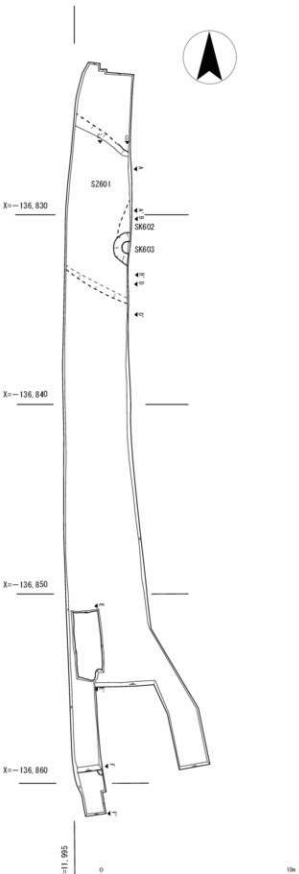
ＳＺ601　Ⅳ層から切り込む落ち込みで、幅8.20ｍ深さ0.52ｍ以上である。平面プランは、確認することが困難であった。また、遺物の出土は確認されなかった。Ⅳ層から切り込んでいることから、城下町形成以前の遺構または、自然地形の可能性がある。

ＳＫ602　調査区東壁で確認した土坑である。長さ1.8ｍ以上、深さ1.0ｍ以上である。下部で膨らむ袋状の土坑である。上層の近代以降の整地層並びにＳＫ603によって削平を受けている。出土遺物に年代の特定できる遺物が少ないが、明治期と思われるＳＫ603によって切られていることから、明治期以前の遺構であるものと考えられる。出土した軒平瓦の文様は、これまでに上野城跡や上野城下町遺跡で出土している瓦とは異なっており、城と町屋のどちらに起因するものかは断定できなった。出土した瓦の平・丸瓦と桟瓦の割合は、平・丸瓦の方が多かった。

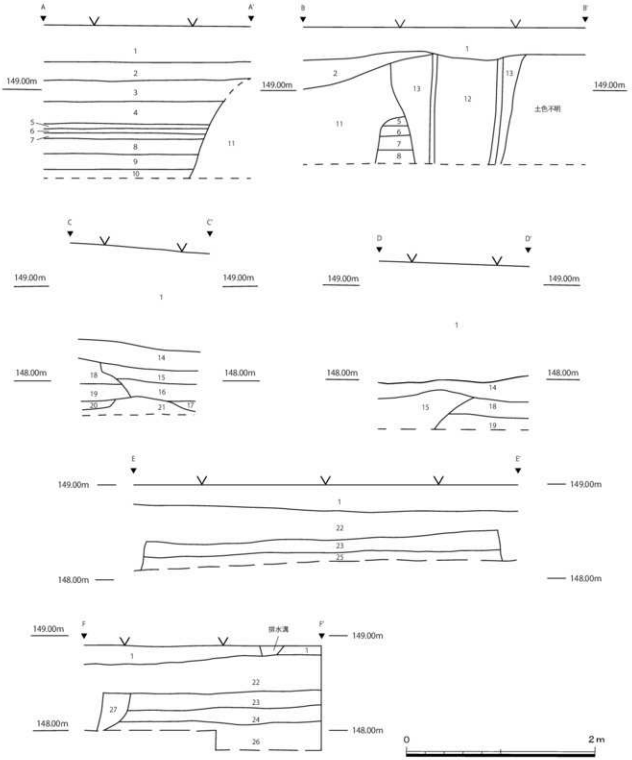
ＳＫ603　調査区東壁で確認した土坑である。長径1.8ｍ、深さ1.5ｍ以上で円形を呈する。土坑中心部には、厚さ約６cmのモルタル製の円筒状構造物が埋設されており、明治期の便槽と思われる。便槽は確認された高さよりさらに深くなっており、下部構造は不明である。また、掘方である13層からは、陶磁器が出土している。なお、土層断面南部は、壁面崩落のため、土色・土質は不明である。

第２表　遺構一覧表

遺構	番号	計測値（m）			主な遺物	備考
		長さ 長径	幅 短径	深さ		
SZ	601	―	8.20 m	0.52 m以上	なし	
SK	602	1.80 m以上	―	1.00 m以上	瓦	
SK	603	1.80 m	0.90 m	1.50 m以上	陶磁器	近代便槽



第３図　遺構平面図（1：200）



1．5GY2/1 緑黒色砂砂（アスファルト路床に伴う造成土）
2．2.5Y7/6 明黄褐色砂礫混じりシルト（現代造成土）
3．2.5Y5/4 黄褐色砂礫混じりシルト（現代以前の造成土）
4．5GY6/1 オリーブ灰色砂礫（現代以前の造成土）
5．10YR4/2 灰黄褐色シルト（グライ化）
6．N3/ 暗灰色シルト（2.5GY7/1 明灰オリーブシルトブロック 40%含む）
7．10G4/1 暗緑灰色シルト（2.5GY7/1 明灰オリーブシルトブロック 10%含む）
8．N3/ 暗灰色シルト
9．10G5/1 緑灰色シルト
10．10G4/1 暗緑灰色シルト
11．2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫（瓦 80%包含）
12．2.5Y5/4 黄褐色砂礫
13．7.5Y5/2 灰オリーブ砂礫混じりシルト
14．5Y4/1 灰色シルト（粘性ややあり）5Y4/2 灰オリーブシルトブロック（φ1cm～5cm）、2.5Y3/オリーブ褐色シルト（φ1cm～5cm）少量混。5mm以下の角礫混
15．5Y4/2 灰オリーブ色シルト（粘性ややあり）
16．2.5Y4/2 暗灰黄色シルト（粘性ややあり）
17．5Y3/2 オリーブ黒色シルト（粘性強くあり）
18．2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト（粘性ややあり）、上層に鉄分（7.5YR4/6 褐色）を斑状に含む
19．10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（粘性なし）
20．5Y5/3 浅黄色粘土
21．5Y6/2 灰オリーブ色粘土
22．灰色礫または灰色細砂層（造成土）
23．褐色粘土または褐色粘土層（経年遺物包含層）
24．青灰色粘土層（グライ化層）
25．褐色粘土層縞りあり（ベース）
26．浅黄色細砂（ベース）
27．褐色シルト（遺構埋土）

I 層
II 層
IV 層
SK602
SK603
II 層
II 層
SZ601
IV 層
II 層
II 層
IV 層
Pit

第４図　土層断面図（1：40）

Ⅳ 遺　物

今回の調査では、整理箱９箱分の遺物が近代以降の造成土中から出土している。造成土における地山ブロックの混じり方から、搬入土である可能性は低いものと考えられる。ここでは、出土遺物を遺構ごとに整理し、造成土中より出土したものについては、まとめて報告することとする。遺物の年代については、章末註釈によった[1)]。

ＳＫ602出土遺物（１～21）　出土遺物はすべて近世以降のものである。１は、青磁椀で口縁部のみ残存している。緑色の釉が施されている。

２は、軒平瓦である。瓦当の文様は、中心部に菱型で三つ葉が表現されており、巻の緩い唐草文が脇に配されている。３～13は、平瓦である。表面は工具ナデ、端部はヘラ切りにより調整されている。14は、軒丸瓦である。瓦当は欠損している。15～17は、丸瓦である。18・19は、桟瓦である。20・21は、道具瓦である。20は、短辺5.6cm、厚さ1.6cmで、１単位あたり５本の櫛状具によって条線が施されている。一面は、中心でクロスさせるように、もう一面は、長辺に対して並行方向に施されている。21は、小型の道具瓦である。長さ8.7cm、表面は工具ナデの後ミガキが施される。出土した瓦は桟瓦に比べ、丸瓦、平瓦の割合が多い。

ＳＫ603出土遺物（22～32）　出土遺物は全て近世以降のものである。22は、陶器の灯明受皿である。底部にヘラ削り痕がみられ、内外面に灰釉が施されている。口縁部に半月状の切れ込みがある。23・24は、陶器の皿である。23は、内外面に灰釉が施されている。24は、口縁端部は無釉である。25は、陶器の鉢である。内外面施釉で口縁端部は外側に丸く折り返し収める。26は、陶器の壺で内外面に鉄釉が施されている。27は、信楽焼[2)]の擂鉢である。見込に擂目を密に施し、高台を持つ。内外面に泥漿が施されている。18世紀後半以降のものである。

28は、磁器の皿で内面に染付が施されている。29～31は、磁器の椀である。29は、外面に草花文が施されている。30は、高台内に角変形字の印が押されている。31は、高台内に角変形字、見込に「□□年製」の文字が書かれている。32は、磁器の蓋である。高台内に角変形字、内外面に草花文が施されている。

包含層出土遺物（33～37）　近代以降の造成による影響を受けていない層（Ⅲ層）から出土した遺物である。遺物は全て近世のものである。

33は、土師器の鍋で、外面にススが付着している。34は、土師器の皿で、手づくねにより成形されている。

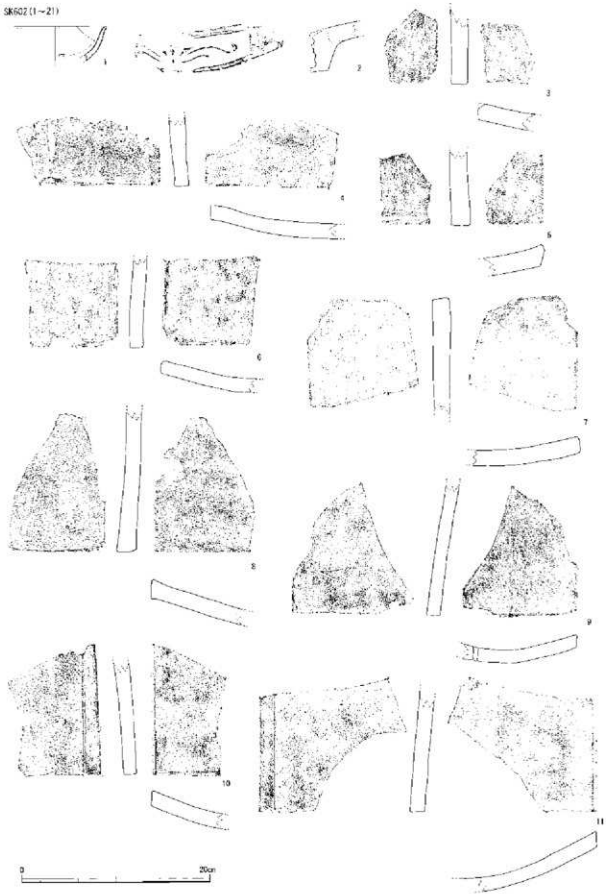
35は、信楽焼の擂鉢である。擂目は１単位あたり３本以上の櫛状具により施条されている。18世紀前半のものである。36は、陶器の土瓶で外面に鉄釉が施されている。腰部から丸みをおびて垂直方向に立ち上がり、肩部に山形の耳を持つ。内面注口付け根には３か所に穴が穿かれている。

37は、鉄釘である。長さ6.5cmで頭部は、長さ1.7cm、幅0.9cmの方形を呈している。

造成土出土遺物（38～94）　江戸時代の基盤層並びに堆積層の多くは既に破壊されており、大きく攪乱を受けていた。しかし、近代以降の造成土（Ⅱ層）中から近世の遺物が多数出土していることから、前述のように上野城下町遺跡に由来する遺物であると判断した。

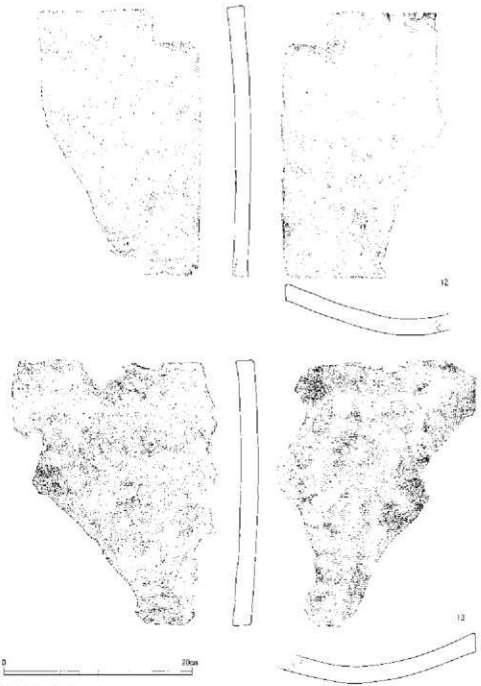
38･39は土師器の皿で、手づくねによるものである。

40は、陶器の皿である。内外面ロクロナデによって成形されている。内面に重ね焼き痕が残る。41は、瀬戸焼の天目茶椀である。内外面に鉄釉が施され、口縁部は、玉縁状に収める。17世紀後半のものである。42は、陶器の椀の口縁部で、緑色釉が施されている。43は、京・信楽系[3)]の椀で見込に鉄絵が施されている。44は、筒形椀で底部から胴部にかけて垂直方向に屈曲するように立ち上がる。45は、京・信楽系の椀で見込に鉄絵が施されている。46・47は、陶器の仏飯具である。46は、底部に回転糸切り痕が残る。47は、外面に白色系の釉が施され、高台部は無釉である。48は、陶器の蓋と思われ、高台に透かしがある。49～59は、信楽焼擂鉢である。49は、

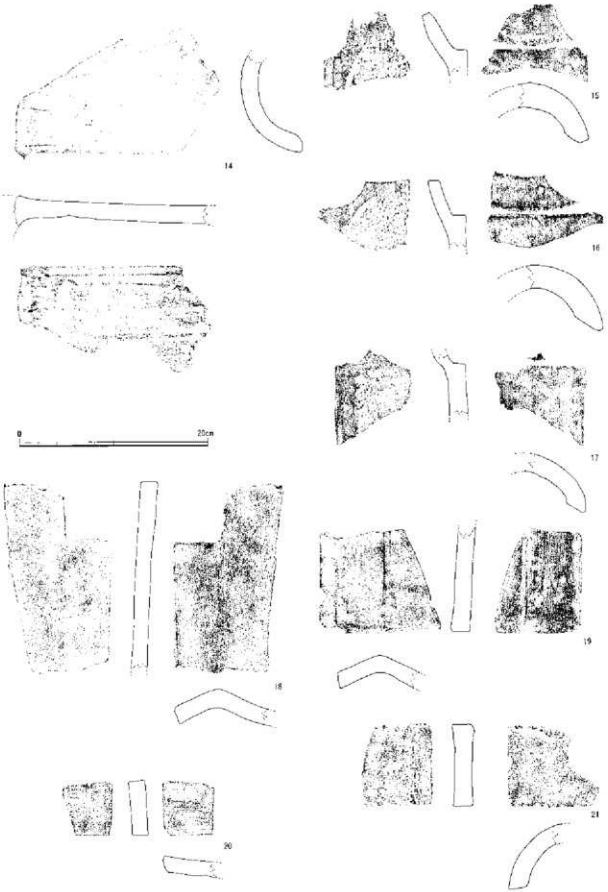


第5図　遺物実測図①（1：4）

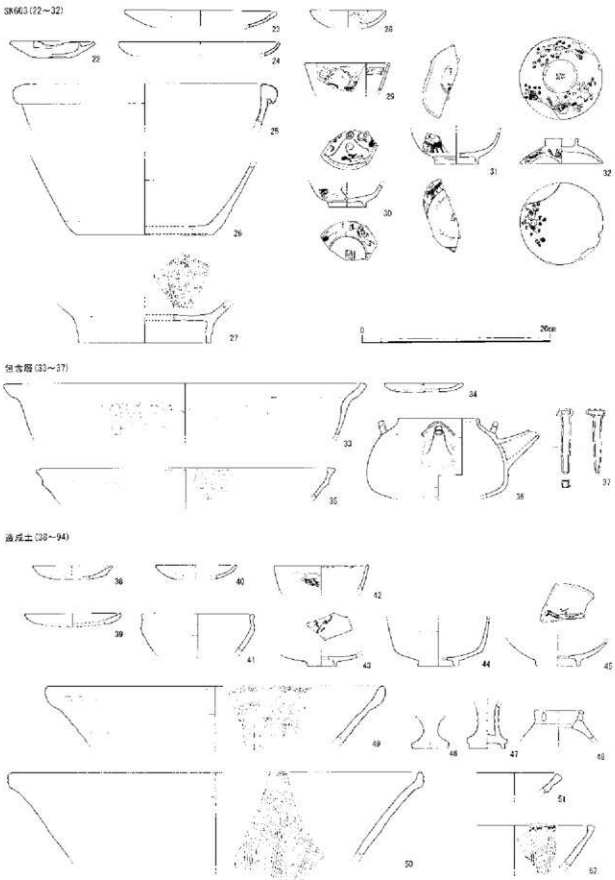
擂目は１単位あたり６本の櫛状具により施条され、口縁部は直立し縁帯に凹線が巡る。17世紀後半のものである。50は、擂目は１単位あたり６本の櫛状具により施条され、胎土に長石を多く含む。口縁部は直立し縁帯に凹線が巡る。17世紀後半のものである。51は、口縁部のみ残存し、擂目本数は不明である。52は、擂目は１単位あたり6本の櫛状具により施条されている。18世紀前半のものである。53は、擂目は１単位あたり５本の櫛状具により施条され、胎土に長石を多く含む。内面は使用により摩耗している。底部に下駄印が残る。焼成は甘く、17世紀前半のものと思われる。54は、擂目は１単位あたり６本の櫛状具により施条され、胎土に長石を多く含む。55は、擂目は１単位あたり７本の櫛状具により施条され、見込に擂目を持つ。内面にススが付着している。56は、擂目は１単位あたり６本の櫛状具で施条され、胎土中に長石を多く含む。57は、擂目は１単位あたり７本の櫛状具により施条されている。見込には、格子目状に擂目が施されている。



第６図　遺物実測図②（1：4）



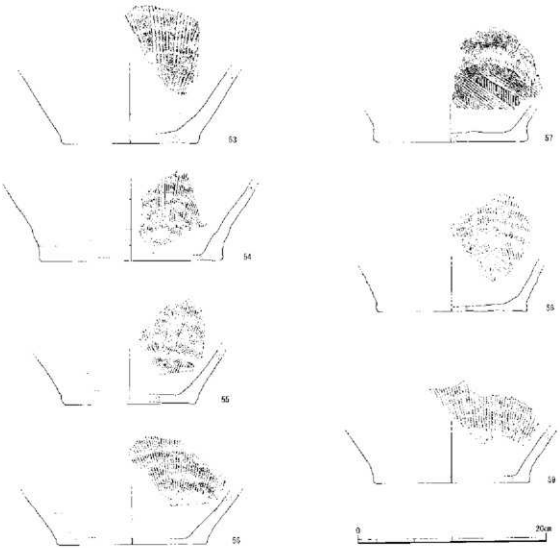
第7図　遺物実測図③（1：4）



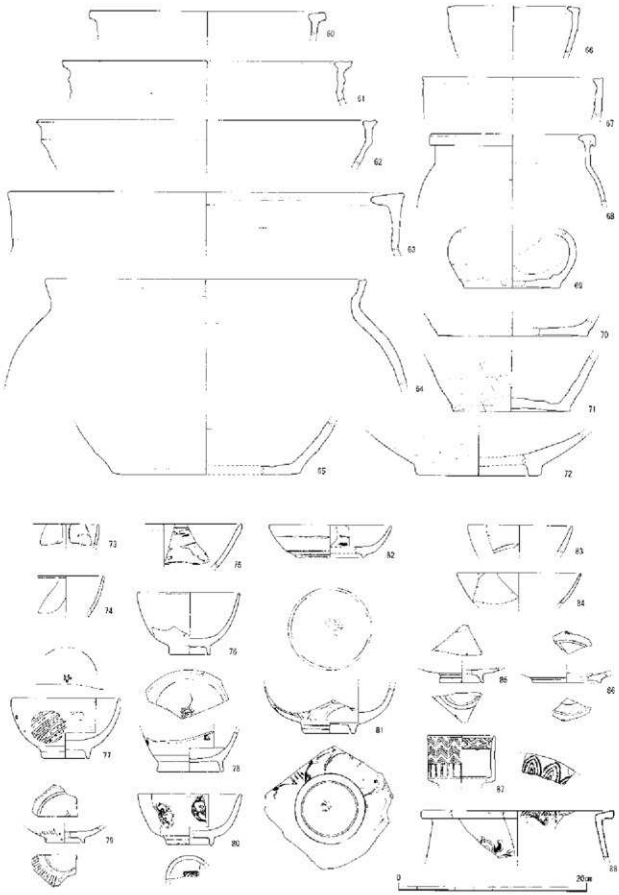
第８図　遺物実測図④（1：4）

58は、擂目は1単位あたり6本の櫛状具により施条されている。櫛目の間隔は密で、見込に格子目状の擂目が施されている。59は、擂目は1単位あたり6本の櫛状具により施条され、胎土に長石を多く含む。内面に重ね焼きによる痕跡が残り、外面には泥漿を施す。18世紀前半以降のものである。60は、陶器の鉢である。61は、信楽焼の鉢で胎土に長石を多く含む。62は、陶器の鉢である。63は、陶器の甕で内外面に鉄釉が施されている。口縁部は、垂直に立ち上がる体部から直角に内方へ作られ上方に平坦面を持つ。64は、陶器の甕で内外面に釉薬が施されている。65は、陶器の鉢の底部で、内面に焼成時降灰の痕跡が残る。66は、陶器の鉢で、内外面に鉄釉が施されている。口縁部は内方に折り返し作られる。67は、信楽焼の鉢で胎土に長石を多く含む。68は、陶器の甕で内外面に鉄釉が施されている。69は、陶器の壺の体部から底部で内外面に鉄釉が施されている。70・71は、甕または壺の底部である。70は、底部に静止糸切り痕が残る。72は、壺の底部で高台を持つ。

73～88は、磁器である。73は、椀で内外面に染付が施されている。74は、椀で外面に染付が施されている。75は、椀で内面に染付が施されている。76は、椀で外面高台付け根に二重圏線文の染付が施されている。77は、椀で見込にコンニャク印判による五弁花文が、外面には丸文が施されている。18世紀のものである。78は、広東椀で内外面に染付が施されている。79は、皿で内外面に染付が施されている。80は、椀で体部外面に花文、高台内に角渦福文が施されている。81は、見込にコンニャク印判による五弁花文が、外面に草花文が施される。18世紀のものである。



第9図　遺物実測図⑤（1：4）



第10図　遺物実測図⑥（1：4）

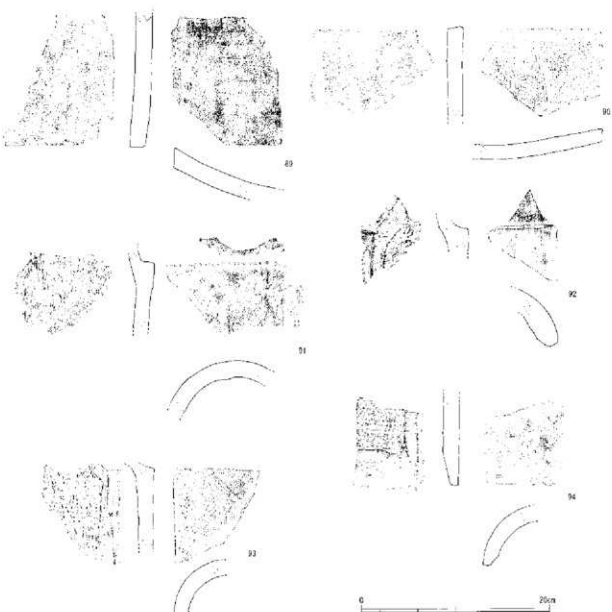
82は、皿で内外面に染付が施されている。83･84は、椀で外面に染付が施されている。85・86は、皿で内外面に染付が施されている。87は、筒形椀で口縁部内面に四方襷文、体部外面に矢羽文が施されている。18世紀のものである。88は、植木鉢である。口縁部は、やや内傾する体部から外方に直角に作られ上方に平坦面を持つ。内外面に染付が施されている。89・90は、平瓦である。凸面は工具ナデ、端部はヘラ切りにより調整されている。91 ～ 94は、丸瓦である。

註

1）愛知県史編さん委員会『愛知県史　別編　中世・近世瀬戸系』2007
大橋康二『年代別壽麦猪口大辞典』2009
畑中英二『続・信楽焼の考古学的研究』2007

2）信楽産陶器と伊賀産陶器は峻別が困難であるため、両者を合わせて信楽焼とする。

3）施釉小物の京焼と信楽焼は峻別が困難であるため、両者を合わせ京・信楽系とする。



第11図　遺物実測図⑦（1：4）

第３表　出土遺物観察表①

NO	写真番号	種類	器種	遺構・層位	部位・残存度	法量（cm）				技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（外面・胎土）	特記事項
						口径	現存高台径	器高						
1	016-02	青磁	椀	SS002	口縁部　1/12以下	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	密	良	N7/0 5GY7/1	
2	031-01	瓦	軒平瓦	SS002	瓦当	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/	
3	018-03	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/1	
4	026-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/	
5	018-04	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/1	
6	018-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/3	
7	024-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/1	
8	029-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/	
9	028-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/	
10	026-02	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/	
11	027-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/	
12	025-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/1	
13	022-01	瓦	平瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/1	
14	025-01	瓦	軒丸瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り	-	良	N5/1	瓦当欠損
15	029-01	瓦	丸瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/1	
16	019-01	瓦	丸瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/1	
17	021-01	瓦	丸瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N5/1	
18	030-01	瓦	熨瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/	
19	029-02	瓦	熨瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/	
20	018-02	瓦	道具瓦	SS002	-	-	-	-		ナデ、ミガキ、櫛描き		良	N4/1	
21	020-02	瓦	道具瓦	SS002	-	-	-	-		工具ナデ・ヘラ切り・ミガキ	-	良	N4/1	
22	005-04	陶器	灯明受皿	SS003	口縁部　5/12 底部　12/12	8.8	3.6	1.7		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密	良	5Y7/2	
23	005-05	陶器	皿	SS003	口縁部　1/12	16.0	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y8/3	
24	005-06	陶器	皿	SS003	口縁部　1/12以下	16.6	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y8/3	
25	001-02	陶器	鉢	SS003	口縁部　1/12	24.8	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや密	良	5Y7/2	
26	008-02	陶器	壺	SS003	底部　4/12	-	14.2	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	7.5YR3/2	
27	002-03	陶器	擂鉢	SS003	底部　2/12	-	14.2	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	やや良	7.5YR3/3	信楽焼
28	005-03	瓶器	皿	SS003	口縁部　1/12	7.9	-	-		内：ロクロナデ	密	良	N8/0	
29	005-01	瓶器	椀	SS003	口縁部　2/12	8.8	-	-		染付	密	良	N8/0 7.5GY8/1	
30	004-02	瓶器	椀	SS003	高台部　5/12	-	3.8	-		染付	密	良	N8/0 7.5GY8/1	高台内　角変形字
31	004-04	瓶器	椀	SS003	高台部　5/12	-	4.2	-		染付	密	良	N8/0 7.5GY8/1	見込「□□年製」
32	004-01	瓶器	蓋	SS003	口縁部　8/12 高台部　12/12	8.6	3.2	2.7		染付	密	良	N8/0 7.5GY8/1	高台内　角変形字
33	012-02	上師器	鍋	近世包含層	口縁部　1/12	37.6	-	-		工具ナデ、ヨコナデ	密	-	10YR7/3	
34	011-06	上師器	皿	近世包含層	口縁部　1/12	8.0	-	0.9		ナデ、スピオサエ	密	-	5YR7/6	
35	011-01	陶器	擂鉢	近世包含層	口縁部　1/12以下	30.4	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	10YR8/1	信楽焼　擂目３本以上／単位
36	012-03	陶器	土瓶	近世包含層	口縁部　1/12	8.0	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y7/4 7.5YR3/3	
37	017-03	鉄製品	釘	近世包含層	完存	-	-	-			-	-	-	長さ 6.5cm
38	003-04	上師器	皿	造成土	2/12	8.4	-	1.5		ヨコナデ	密	良	5YR4/4	
39	015-04	上師器	皿	造成土	1/12	10.2	-	-		ヨコナデ	密	-	10YR7/4	
40	003-03	陶器	皿	造成土	1/12	8.4	-	1.5		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	10YR8/2	
41	014-05	陶器	天目茶椀	造成土	1/12	11.6	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y8/1 7.5YR3/1	瀬戸焼
42	005-07	陶器	椀	造成土	1/12	7.8	-	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	10GY8/1	
43	005-08	陶器	椀	造成土	底部　3/12	-	3.2	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	2.5YR8/2 10YR8/2	京・信楽系
44	032-01	陶器	陶彩椀	造成土	底部　3/12	-	4.2	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y8/3	
45	016-04	陶器	椀	造成土	高台部　4/12	-	4.6	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	2.5Y8/2 2.5Y7/3	見込鉄絵
46	006-04	陶器	弘前只	造成土	底部　12/12	-	3.8	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y8/2	
47	012-04	陶器	弘前只	造成土	高台部　11/12	-	3.6	-		内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	10YR8/2 2.5GY8/1	

第４表　出土遺物観察表②

NO	実測番号	種類	器種	遺構 層位	部位・残存度	法量（cm） 口径	底径 高台径	器高	技法・文様の特徴	胎土	焼成	色調（釉薬）	特記事項
48	016-03	陶器	碗	造成土	高台部　2/12	-	5.0	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	10YR6/3 7.5YR6/4	
49	012-01	陶器	擂鉢	造成土	口縁部　1/12	35.2	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5YR7/6	信楽焼　擂目６本／単位
50	009-01	陶器	擂鉢	造成土	口縁部　1/12 以下	43.0	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y4/2	信楽焼　擂目６本／単位
51	003-05	陶器	擂鉢	造成土	1/12	-	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5YR3/1	信楽焼
52	013-05	陶器	擂鉢	造成土	口縁部　1/12 以下	-	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5YR/2	信楽焼　擂目６本／単位
53	009-02	陶器	擂鉢	造成土	底部　2/12	-	12.0	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	5YR7/4	信楽焼　擂目５本／単位
54	013-01	陶器	擂鉢	造成土	底部　1/12	-	18.8	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	5YR5/3	信楽焼　擂目６本／単位
55	013-03	陶器	擂鉢	造成土	底部　1/12	-	13.8	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	5YR6/4	信楽焼　擂目７本／単位
56	008-04	陶器	擂鉢	造成土	底部　2/12	-	15.0	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	5YR5/4	信楽焼　擂目６本／単位
57	008-03	陶器	擂鉢	造成土	底部　3/12	-	15.0	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	10YR6/4	信楽焼　擂目７本／単位
58	013-02	陶器	擂鉢	造成土	底部　2/12	-	15.5	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部糸切	密	良	5YR7/4	信楽焼　擂目６本／単位
59	008-01	陶器	擂鉢	造成土	底部　2/12	-	14.0	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y5/3	信楽焼　擂目６本／単位
60	007-01	陶器	鉢	造成土	口縁部　1/12	28.4	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	7.5YR3/2	
61	014-01	陶器	鉢	造成土	口縁部　1/12 以下	30.6	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	N8/0 5YR3/3	信楽焼
62	007-02	陶器	鉢	造成土	口縁部　1/12	35.4	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	5YR/1	
63	015-02	陶器	甕	造成土	口縁部　1/12 以下	42.0	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	N8/0 7.5YR4/3	
64	007-03	陶器	甕	造成土	口縁部　1/12	33.8	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	7.5YR3/1	
65	006-06	陶器	鉢	造成土	底部　2/12	-	16.6	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y7/1 10YR6/3	
66	006-06	陶器	鉢	造成土	口縁部　1/12	12.0	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	7.5YR3/2	
67	014-03	陶器	鉢	造成土	口縁部　1/12	19.0	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	7.5YR6/3 5Y7/4	信楽焼
68	015-03	陶器	甕	造成土	口縁部　2/12	16.8	-	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	2.5Y6/1 5YR4/3	
69	011-04	陶器	壺	造成土	底部　4/12	-	10.0	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部糸切	密	良	2.5Y8/2 7.5YR3/2	
70	011-02	陶器	壺または甕	造成土	底部　1/12	-	15.6	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、底部糸切	密	良	5YR6/3 N8/0	
71	015-03	陶器	壺または甕	造成土	底部　3/12	-	12.3	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密	良	7.5YR6/4	
72	016-01	陶器	壺	造成土	高台部　1/12	-	12.4	-	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ロクロケズリ	密	良	5YR6/4 N4/0	
73	014-07	磁器	椀	造成土	口縁部　1/12 以下	-	-	-	染付	密	良	N8/0	
74	014-06	磁器	椀	造成土	口縁部　1/12 以下	-	-	-	染付	密	良	N8/0	
75	016-06	磁器	椀	造成土	口縁部　1/12 以下	-	-	-	染付	密	良	N7/1 5GY6/1	
76	014-02	磁器	椀	造成土	口縁部　1/12 底部　5/12	10.7	4.2	6.6	染付	密	良	N8/0	
77	006-03	磁器	椀	造成土	口縁部　5/12 高台部　3/12	10.8	4.6	6.4	染付	密	良	2.5GY8/1 7.5GY8/1	見込五弁花文
78	014-03	磁器	椀	造成土	高台部　3/12	-	6.8	-	染付	密	良	N8/0	
79	014-05	磁器	皿	造成土	高台部　3/12	-	4.0	-	染付	密	良	N8/0	
80	017-02	磁器	椀	造成土	口縁部　2/12 高台部　4/12	10.0	4.8	5.4	染付	密	良	N8/0 7.5GY3/1	高台内　角渦輪
81	017-01	磁器	椀	造成土	高台部　10/12	-	5.2	-	染付	密	良	N8/0 5BG	見込五弁花文
82	006-01	磁器	皿	造成土	口縁部　1/12 高台部　3/12	12.8	7.0	3.5	染付	密	良	2.5GY8/1	
83	005-02	磁器	椀	造成土	口縁部　1/12	11.0	-	-	染付	密	良	N7/	
84	006-02	磁器	椀	造成土	口縁部　1/12	13.0	-	-	染付	密	良	7.5GY8/1	
85	014-04	磁器	皿	造成土	高台部　3/12	-	4.5	-	染付	密	良	N8/0	
86	004-03	磁器	皿	造成土	高台部　3/12	-	6.8	-	染付	密	良	N8/0 7.5GY8/1	
87	006-05	磁器	椀	造成土	口縁部　3/12 底部　3/12	7.2	5.6	5.0	染付	密	良	N8/0 7.5GY3/1	
88	016-05	磁器	猪口	造成土	口縁部　1/12	20.2	-	-	染付	密	良	5YR6/4 N4/0	
89	001-01	瓦	平瓦	造成土	-	-	-	-	工具ナデ	やや密	良	2.5YZ7/1 10YR5/2	
90	010-02	瓦	平瓦	造成土	-	-	-	-	工具ナデ、ミガキ	密	良	N5/1	
91	002-01	瓦	丸瓦	造成土	-	-	-	-	工具ナデ	やや粗	良	N4/	
92	003-01	瓦	丸瓦	造成土	-	-	-	-	工具ナデ、ケズリ、ミガキ	密	良	N4/	
93	010-01	瓦	丸瓦	造成土	-	-	-	-	工具ナデ	密	良	5YR/1	
94	002-02	瓦	丸瓦	造成土	-	-	-	-	工具ナデ	密	良	N4/	

V 結　語

1　上野城下町遺跡出土の擂鉢

近年の上野城下町遺跡をはじめとする、近世遺跡の発掘調査の進展により、出土陶磁器の資料数が充実してきた。これを受け、伊賀地域で出土する近世陶磁器の産地を同定し、その流通を解明することが期待されている[1]。本節では、伊賀地域から出土する近世陶磁器の中でも、一定数の出土量が確認されており、年代決定も可能である器種の擂鉢に関して、産地及びその流通について検討する。

伊賀地域においては、13世紀後半以降擂鉢の出土が確認されており、城下町形成以前は、ほぼ全てが信楽焼であることが明らかになっている[2]。

今回の調査では、擂鉢が13点出土しており、それらを形態・胎土・色調をもとに産地同定を行ったところ全て信楽焼であった。また、第１～４次調査では18点、第５次調査では26点の擂鉢が出土しており、産地同定を行ったところ全て信楽焼であった。この他の上野城下町遺跡の既往調査において出土した擂鉢もほぼ全て信楽焼である[3]。出土資料の年代も、17世紀前半から18世紀後半以降までと長い。このことから、中世以来擂鉢は、信楽焼を使用するという地域の特徴が近世以降も継続することが考えられる。

伊賀地域で使用されていた擂鉢のほとんどが信楽焼であったのは、瀬戸や常滑といった他の産地と比較して、信楽が伊賀地域に近接しているという地理的優位によるところが大きいと考えられる。

一方で、施釉小物は信楽焼に限定されるわけではなく、瀬戸美濃などが産地のものもあり、また、磁器は肥前系のものが多く流入し、土師器鍋は、南伊勢系のものも認められることから、器種による産地の偏在または、選択的な受容があった可能性がある。単純な産地からの距離だけではなく、他の要素によって、流通の範囲や割合が規定されていることを想定する必要がある。

今後の課題として、大きく２つのことが挙げられる。一つ目は、伊賀地域全体の近世陶磁器の流通について不明な点である。伊賀地域の上野城下町遺跡以外の近世遺跡でも信楽焼擂鉢が主体を占めるのか、また、擂鉢以外の器種の産地はどのような状況であるのか年代ごとに把握することによって、伊賀地域全体の近世陶磁器の流通について明らかにしていく必要がある。二つ目は、隣接する他地域との比較が行われていない点である。津・久居・南山城・大和の一部といった同じ藤堂家の支配領域や亀山・松阪・水口といった近隣の城下町との比較によって、陶磁器の流通の違いがどういった要因に規定されるものであるのか明らかにする必要がある。以上のように、地域内における状況の把握と、地域外との比較によって関西・東海地域における伊賀地域の流通の特色を捉えることが可能になる。

2　調査区の城下町における位置

平成21（2009）年、上野市駅前の再開発に伴い、伊賀市教育委員会によって発掘調査が行われ、明治期と推定される東大手門に続く土橋の西側石垣と外堀北側石垣が検出された[4]。その成果に基づき、東大手門・外堀・土橋の位置の復元がなされた[5]。上野城東大手門は、上野城廃城後に警察署の施設として利用された後、1880年代後半に取り壊されている[6]。上野城下町の明治初期城下町図（第13図）には、東大手門より南に延びる東之堅町筋が描かれ、その東側には「町屋」の記載があり、さらに東には「薬師寺」「威徳院」「隅ノ坊」の寺院が並ぶことが確認される[7]。今なお残る地割などからも、本町筋側に出入り口を持つ南北十五間の建物があったものと思われる。

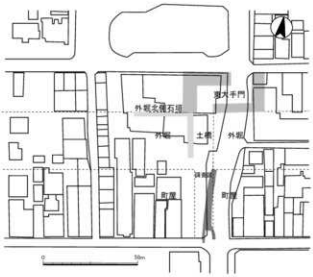
今回の発掘調査地点を復元図上で示したのが第12図になる。今回の調査地点は、調査により明らかになった上野城東大手門の南、約30m～70mの地点に位置している。その大部分は、東大手門に続く土橋から南方へと延びる東之堅町筋の道路上に位置するものと考えられる。しかし、調査区の大部分は、近代以降の建造物の基礎や、水道管・ガス管などの地

下埋設物によって大きく攪乱を受けており、近世に遡る建物や道路等の痕跡を確認することができなかった。

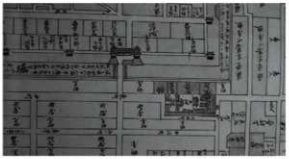
今回、調査区北東で確認された、ＳＫ603は、モルタル製の便槽を持っていることから明治期に造られた近代の便所跡と考えられる。調査区の大部分が東之竪町筋の道路上に位置することから、検出されたＳＫ603は、道路東側の町屋に由来するものと考えられる。本町通りから外堀までが十五間（約30m）であるので、便所は、町屋の北側、外堀近くに設けられていたと想定される。

東大手門解体後、東之竪町筋の道路を東方向に振りかえ、旧城内に新たに作られた道路との接続が図られた。本町通り以南の東之竪町筋に関しては、戦時中に防火対策の一環として拡張がなされている[8]。

以上のように、上野東町付近においては、明治初期まで、江戸時代以来の町割を留めており、今回の発掘調査でその町屋の痕跡を確認することができた。



第12図　上野城下町町割復元図（伊賀市教育委員会2010を基に作成）（1：2,000）



第13図　明治初期城下町図（伊賀市上野図書館蔵）

註

1）三重県埋蔵文化財センター『霧生城跡発掘調査報告』2008

2）水谷侃司「信楽焼擂鉢から見る中世伊賀の流通」『金沢大学考古学紀要』37号　金沢大学人文学類考古学研究室　2015

3）第１表参照。

4）伊賀市教育委員会『上野城跡（11次）発掘調査報告』2010、伊賀市教育委員会『上野城跡（12次）発掘調査報告』2011

5）第12図参照。

6）伊賀市『伊賀市史』第３巻　2014

7）絵図の年代に関しては、福井健二「上野城と城下町」2004　によった。

8）奥瀬平七郎『目で見る伊賀の100年』郷土出版社1990

写 真 図 版

調査区全景（北西から）

ＳＫ602・ＳＫ603（北西から）

調査区掘削状況（南から）

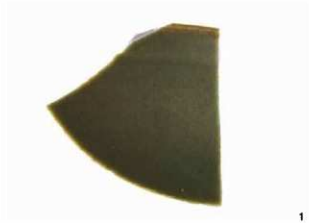
ＳＺ601土層（北から）

ＳＫ602・ＳＫ603土層（西から）

調査区壁面Ｆ－Ｆ'土層（南から）

調査区壁面（西から）

写真図版3（出土遺物）

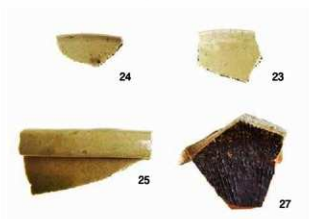

1

2

20表

20裏

22



26

32内

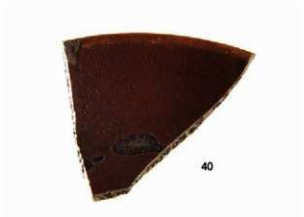
32外

28
29
30
31

33
34
35
36

37

38
39


40

41
42
44
45
43

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60
61
66
64
63
68

62
67

65

69

71

70
72

77外

77内

81外

81内

73
74
75
88
83
84
82
80
85
76
86
79
78

87

報告書抄録

ふりがな	うえのじょうかまちいせき（だい６じ）はっくつちょうさほうこく
書名	上野城下町遺跡（第６次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３７７
編著者名	水谷侃司
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515−0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2018（平成30）年３月９日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上野城下町遺跡 （うえのじょうかまちいせき）	三重県伊賀市 （みえけんいがし） 上野東町 （うえのひがしまち）	216	a1230	34度 45分 59秒	136度 07分 51秒	20161215 ～ 20170829	140㎡	街路整備事業 （街路）伊賀上野橋新都市線

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野城下町遺跡	城館跡	近世	土坑	土師器・陶磁器・瓦・鉄製品	

要約	上野城下町遺跡は近世の城下町遺跡である。調査地は、津城と上野城を結ぶ伊賀街道（本町通り）と上野城東大手門より南下する東ノ竪町筋の交わる地点に位置する。絵図によると、上野城東大手門南の町屋が存在した地点である。近代以降の開発により、大きく攪乱を受けており、近世以前の遺構はほとんど確認されなかった。造成土中及び、近世包含層より17世紀～19世紀の土師器・陶磁器・瓦・鉄製品などの遺物の出土が確認された。

三重県埋蔵文化財調査報告３７７

上野城下町遺跡（第６次）発掘調査報告

2018（平成30）年３月９日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　文化印刷有限会社